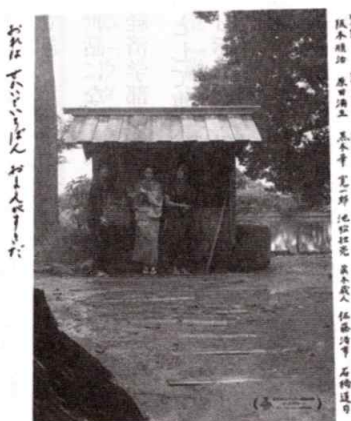


# 西川伸一の オススメシネマ ②3

## せかいのおきく (日・2023)



私生家 鹿沼市 鹿沼 西川伸一 寛一郎の父 西川寛一郎の生家 鹿沼市 鹿沼 西川伸一

一九世紀後半の江戸が舞台である。住人の糞尿を買って農家に売る下肥買いが江戸のゼロエミッション社会を支えていた。それを生業とする矢亮(池末壮亮)は紙屑買いの中次(寛一郎)をスカウトする。不慣れな中次は仕事が遅い。見兼ねた中次は下肥桶から糞尿を素手で掻き出してみせる。その仕事ぶりに打たれた中次は矢亮を「あにいい」とよぶようになる。

中次は紙屑買い時代に公衆便所の前で雨宿りをしていておきくは木挽町の長屋に元侍の父・源兵衛(佐藤浩市・寛一郎の父)と二人で暮らし、寺子屋で読み書きを教えている。木挽町は中次の持ち場となった。仕事に入ったある日、中次は源兵衛から「せかい」という言葉が教えられる。どこまで行っても空の果ては同じだと。だが、江戸と近郊農村が「せかい」の中次にはピンとこない。

## せかいのおきく

その後、朝早くに侍三人が源兵衛を迎えに訪れる。源兵衛の不在に気づいたおきくは後を追う。次のシーンで、その侍三人がかぶり物を取って森に向かって一札する。源兵衛は斬殺されたのだ。それをみたおきくも口止めに声を切られる。声を失ったおきくはずっと自宅に引きこもる。寺の住職が子どもたちを連れて職場復帰を懇願する。ようやくおきくは心を開く。やがて中次はつてで手に入れた習字の紙をもつておきくを見舞う。おきくは家に請じ入れようとするが、中次は「またにしゃす」と帰って行く。これがかっこいい! お互いに恋心が芽生えていた。おきくが習字のお手本に「ちゅうぎ(忠義)」と書くところを、「ちゅうじ」と書いてし

まい笑い転げる。これがかわいい!

通ってくるたびに中次はやせていく。気づいたおきくは中次のためにおにぎりをごさえる。

ところが、急いで家を出たところ大八車とぶつかっておにぎりは轢かれてしまう。泥だらけのおにぎりをもって、おきくは中次の長屋を探し当てる。小雪が舞い出す。おきくの素足が真つ赤に腫れた頃に中次が帰ってくる。おきくはいきさつを懸命にジェスチャーで訴える。ついに理解した中次は地面をたたき空を指して、必死に自分の気持ちを伝えようとする。「せかいでいちばんおまえがすきだ」と。雪が積もるワンカットが挿入される。これほど長い間中次は告白し続けていた。そして二人は抱擁を交わす。長屋からだれか出てこないか心配してしまった。下肥買いがいかに賤視されていたことか。対照的に、矢亮の「ここ笑うとこだぜ、中次」の決め台詞には笑えた。「おれたちがいなければ江戸はクソまみれだ」との気概を胸に、笑って世界を駆けるのだ。さわやかなラストシーンがそれを暗示する。ほぼ全編モノクロだが、おきく、中次と矢亮、そして糞尿が一瞬カラーになる。

(二〇二三年四月二九日・テアトル新宿)

(にしかわ・しんいち／明治大学教授)